

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：34510

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12963

研究課題名（和文）アイデンティティと「穢れ」：原始キリスト教会形成プロセスにおける「他者」の受容

研究課題名（英文）Identity and "Impurity": Acceptance of "Others" during the Formation of Primitive Christianity

研究代表者

大澤 香 (Ozawa, Kaori)

神戸女学院大学・文学部・准教授

研究者番号：10755424

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、まず、第二神殿時代における「異邦人の穢れ」概念の形成と、捕囚後イスラエルのアイデンティティの確立の関連を明らかにした。次に、第二神殿時代ユダヤ教において、自然界の秩序と神の律法を重ねる認識が、後に第二神殿時代ユダヤ教から分岐して成立したキリスト教の異邦人受容の基盤となった可能性の考察へと進んだ。「他者の受容」と恐らく表裏一体の過程としてある「他者」概念そのものの成立について、「キリスト教形成期における『他者』の実態：共生の地盤としての異邦人」（2022～2025年度）で発展的に継承しつつ、原始キリスト教のアイデンティティ形成における、「異邦人の穢れ」概念消化の内的根拠を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、古代イスラエルのアイデンティティの確立と「異邦人の穢れ」概念の関連、自然法と律法概念との関連等の考察を通して、第二神殿時代ユダヤ教から分岐する形で生じた原始キリスト教の形成過程における異邦人受容の内的根拠について分析を行った。第二神殿時代ユダヤ教の中にあつた排他的境界付けの図式を初期のキリスト教も取り入れたとの指摘について、その実態の詳細について明らかにするとともに、そこには、境界付けの枠組みの踏襲にとどまらない、他者受容に関連しての新しい意味付けや意味の転換が行われた可能性を指摘するに至った点に、本研究の学術的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study first clarified the connection between the formation of the concept of "Gentile Impurity" in the Second Temple period and the establishment of Israel's identity after the exile. The study then moved on to a discussion of the possibility that the perception of the overlap between the natural order and God's law in Second Temple Judaism may have served as the basis for the acceptance of Gentiles in Christianity, which later diverged from Second Temple period Judaism. This study analyzed the internal basis for a reconception of "Gentile Impurity" in the formation of the identity of primitive Christianity. The formation of the concept of "others" itself, which was probably inextricably linked to the "acceptance of the others" is discussed further in the succeeding study "The Actuality of 'Others' in the Formation of Christianity: Gentiles as the Ground of Coexistence" (FY2022-2025).

研究分野：聖書学、聖書解釈学

キーワード：アイデンティティ 穢れ 異邦人 第二神殿時代ユダヤ教 原始キリスト教

1. 研究開始当初の背景

従来、キリスト教の特徴をユダヤ教やヘレニズム文化との比較によって外的に捉える研究と、キリスト教内部の神学的・教義的研究の相互の関連付けに不十分な点があった。比較研究においては特に、ユダヤ教から派生したキリスト教が、ユダヤ教を継承しつつ、異教世界の文化的影響を受けながらユダヤ教からの転換を経験し、別個の宗教として確立していった過程が構造的に明らかにされる。一方でキリスト教内部の神学的研究では、キリスト教独自の内的世界が研究対象となる。本研究は、キリスト教の特徴を外的に捉える視点と、キリスト教内部の神学的・教義的研究の間の隔たりを埋めるために、キリスト教における他者受容の内的構造を明らかにする必要があるとの問題意識から出発した。

2. 研究の目的

本研究は、「異邦人の受容」というキリスト教成立時の決定的特徴と、キリスト教の思想や神学の内的構造における「他者の受容」との関連を明らかにすることを目的とする。このことによって、キリスト教のアイデンティティ形成を外的構造・内的構造の両方向から考察し、比較研究と神学研究との間の隔たりを埋め、両者を関連付けることを目指す。

3. 研究の方法

(1)旧約聖書では、皮膚病や漏出等、規定によって「穢れている」とされた者が一定期間、宗教儀式から隔離された。しかしこの種の「穢れ」は異邦人に対しては適用されていない。旧約聖書において異邦人が非難されるのは、異教礼拝の文脈と「神を畏れることがない」という道徳上の文脈においてである。しかし第二神殿時代(初期ユダヤ教)以降、血統としての民族に、「聖」と「穢れ」の概念が適用されるという発展があったことが考えられる。旧約聖書から初期ユダヤ教にかけての「穢れ」概念と異邦人との関連を通時的に確認する。

(2)最初期のキリスト教のアイデンティティ形成の「内的構造」を明らかにするための段階的考察として、古代イスラエルにおける異邦人をも対象とする普遍的概念としての道徳概念に焦点をあて、知恵の伝統における「神をおそれる」の概念や古代イスラエルにおける「道徳的穢れ」概念を分析する。

(3)自然法概念の発達に経緯を後付け、第二神殿時代ユダヤ教文書における、自然法議論との対話の展開を分析する。更に、パウロ書簡を分析し、パウロが従来の概念を取り入れつつ、新たな概念構築を試みたことを、「異邦人」、「律法」概念に焦点をあてつつ、明らかにする。

4. 研究成果

(1)「ヘブライ語聖書における捕囚と穢れのメタファー」

捕囚後の第二神殿時代における「異邦人の穢れ」概念の形成は、古代イスラエルのアイデンティティの確立と深く関連していたことが考えられる。古代イスラエルにおける「穢れ」概念の変遷を跡付け、捕囚後のユダヤ教において「穢れ」概念が民族の境界付けのために用いられたことと、捕囚の出来事との関係を、メタファーの性質に着目しつつ分析した。捕囚の文脈において、イスラエルの道徳的穢れが、聖所から一時的に遠ざけられる儀礼的穢れの状態にある女性のメタファーによって表現され、更にこの「穢れ」概念が、捕囚後のイスラエルの民族的共同体において、穢れから自らを遠ざけ「聖なる民」となることへの動機付けとして作用した経緯を考察した。この「穢れ」概念は、「聖なる種族」としての民族の境界付けの方向性と共に、やがて「異邦人の穢れ」概念の形成につながっていったとの考察に至った。本研究成果を、古代中近東研究会において発表し、論文として公表した。

(2)「地のイメージの所産と捕囚後イスラエルの自己理解」

「地」のイメージが、聖書テキスト及び聖書後テキストに与えた影響とそこから生じた多様な解釈を検討した。神の協働者としての「地」のイメージとの共鳴が、様々なテキストにおいて確認された。「神聖法集」において擬人化される「地」は、神に忠実なモデルエージェントとしてのイスラエルの民の姿と重ねられていることが指摘される。「神聖法集」のテキストは、エズラ記を経て、異邦人の穢れと自らを区別する「聖なる種」としての捕囚後イスラエルの自己理解に影響を与えている。「神聖法集」の著者が先行テキストをそのように創造的に受容した背景には、創1:1-2:4aで人間や動物たち生き物に「生命の場」を提供する存在として描かれている地のイメージも響き合っていることが考えられる。そのような神の業の協働者としての地のイメージは、神の掟に忠実な自然界の描写の伝統においても確認することができる。そこには、神の命令に従順な自然と不従順な人間との対比と、神の命令に従順な自然と神によって選ばれた民との対応関係があった。それは、「地を嗣ぐ」選ばれた「義人」の概念と共に、「永遠の植栽」としてのクムラン共同体の自己理解にも影響を与えていると思われる。また更にそのイメージは、聖書

のその他のテキストやキリスト教にも多様な影響を与えたと考えられる。本研究成果を論文としてまとめ、公表した。

(3) 「創造主としての神と古代イスラエルのアイデンティティ形成」

上記(2)の研究成果について、聖書の諸テキストやキリスト教に多様な影響を与えたと考えられる例や、キリスト教が独自の宗教アイデンティティを確立する際、キリスト教の外部との境界づけに、ユダヤ教の諸概念を形を変えつつ踏襲した可能性について考察を進め、日本ユダヤ学会関西例会にて研究報告を行なった。

(4) 「第二神殿時代ユダヤ教の他者受容の基盤としての『創造』」

ヘブライ語聖書および第二神殿時代ユダヤ教文書において確認される人間と自然界との対比的描写の背後に、知覚可能な現象を通して自然本性を探究する視点との共通点を確認しつつ、宇宙的・普遍的秩序と道徳的秩序を重ねる認識との関連について考察を行った。知恵の伝統における「神をおそれる」の概念や古代イスラエルにおける「道徳的穢れ」概念の考察を踏まえて、それらの概念が異邦人をも対象とする普遍的概念であることを確認した。ただし、ヘブライ語聖書および第二神殿時代ユダヤ教文書においては、その普遍性の認識は、「唯一神」「創造神」である神認識のもとで、全被造物の背後にある秩序に神の統治を重ねる視点となっていることを見た。「唯一神」としてのイスラエルの神観を確立した預言者「第二イザヤ」について、そこから異邦人をもその範疇に含む「新しい信仰の可能性」が萌芽的に開けたことが指摘されているが、唯一神・創造主信仰にもとづく宇宙的秩序と神の法の接続も、その新しい可能性の開けの背後にあった認識的展開の一つと見ることが出来る。そしてこの認識が、第二神殿時代ユダヤ教から分岐して成立したキリスト教においても、異邦人受容の基盤となった可能性を指摘するに至った。本研究成果を論文として公表した。

(5) 「初期キリスト教における異邦人受容について:新しい共同体形成のためのパウロによる概念構築の考察」

「ユダヤ人」と二項対立的に位置づけられる「異邦人」概念がパウロによってもたらされたとの Adi Ophir と Ishay Rosen-Zvi による近年の議論 (*Goy: Israel's Multiple Others and the Birth of the Gentile*, Oxford University Press, 2018, 1-178) は、キリスト教における「異邦人の受容」が、単なる経過的事実ではなく、認識の転換を伴う積極的受容であった可能性を示唆しており、詳細な検討を要するものであった。パウロが新しい信仰共同体形成のために、従来概念を取り入れつつ「異邦人」について新たな概念構築を試みたとの Ophir と Rosen-Zvi による議論を、これまでのパウロ研究とも対話可能な議論として積極的に評価しつつ紹介し、その議論をパウロの律法観の考察に応用した。第二神殿時代の唯一神・創造主信仰の世界観のもとでの普遍法(自然法)と律法の接続が、パウロと同時代のディアスポラユダヤ人の著作において確認できる。パウロにおいても類似点がある一方で、律法やユダヤ人の生き方に異教徒を同化させる方向性ではなく、律法の中のユダヤ人と非ユダヤ人を分離する要素を排除した上で律法を再規定している点で、彼の特徴が顕著である。特に、隣人愛へのパウロの強調に注目し、パウロが「律法」概念についても、イエス・キリストにある新しい共同体形成のために、先行する概念を用いしつつ新たな概念を構築していることを示した。研究成果を、日本新約学会学術大会にて発表し、論文として公表した。

(6) Divine Law and 'Natural Law' in Second Temple Judaism and the Acceptance of Gentiles in Early Christianity

上記(1)~(5)の研究成果を踏まえ、本研究課題の成果をまとめ、国際 Workshop において発表した。更に研究成果を英語論文として公表する予定である。

(7)本研究課題の考察の過程において、キリスト教が受容した「異邦人」の概念が、古代イスラエル以降、非常に複雑で多様な概念であること、キリスト教における「異邦人の受容」が、単なる経過的事実ではなく、認識の根本的な転換を伴うものであった可能性に遭遇し、「他者」概念そのものの成立を問う必要性を認識した。上記(5)でも記している Adi Ophir と Ishay Rosen-Zvi による議論から示唆を受けて、ユダヤ学からの問題提起に、聖書学の分野から応答するものとして、原始キリスト教形成期における「他者の受容」と恐らく表裏一体の過程としてある「他者」概念そのものの成立を明らかにすることを目的とする新たな研究の着想に至った。パウロによってもたらされたと考えられる新たな「他者/異邦人」概念が、キリスト教の価値観・思想にとってどのような地盤として作用したのかを分析し、ユダヤ教によって排除された他者(=異邦人)をキリスト教が受容したという従来の概観図では捉えきれない「他者」概念の根本的転換と、キリスト教の成立を支える価値基盤との間の関係を明らかにすることを目指す研究として、本研究課題を発展的に継承する「キリスト教形成期における「他者」の実態:共生の地盤としての異邦人」(JP22K12986)を2022年度から開始している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 大澤 香	4. 巻 22
2. 論文標題 「地のイメージの所産と捕囚後イスラエルの自己理解」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『関西学院大学キリスト教と文化研究』（関西学院大学キリスト教と文化研究センター）	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大澤 香	4. 巻 67(1)
2. 論文標題 「ヘブライ語聖書における捕囚と穢れのメタファー」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『神戸女学院大学論集』（神戸女学院大学研究所）	6. 最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18878/00005665	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大澤 香	4. 巻 0
2. 論文標題 「神の所有としての生 ルカ福音書20章27-40 節についての考察」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『青野太潮先生献呈論文集 イエスから初期キリスト教へ 新約思想とその展開』	6. 最初と最後の頁 173-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kaori Ozawa	4. 巻 55
2. 論文標題 "God-Fearer" in Acts as a Topos: Where Religious Piety and Ethnic Otherness Meet	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ORIENT	6. 最初と最後の頁 105-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大澤 香	4. 巻 69(1)
2. 論文標題 第二神殿時代ユダヤ教の他者受容の基盤としての「創造」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『神戸女学院大学論集』（神戸女学院大学研究所）	6. 最初と最後の頁 49-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18878/00005918	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大澤 香	4. 巻 84(2)
2. 論文標題 初期キリスト教における異邦人受容について：新しい共同体形成のためのパウロによる概念構築の考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『基督教研究』	6. 最初と最後の頁 47-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大澤 香
2. 発表標題 「創造主としての神と古代イスラエルのアイデンティティ形成」（研究報告）
3. 学会等名 日本ユダヤ学会 関西研究例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大澤 香
2. 発表標題 「ヘブライ語聖書における捕囚と穢れのメタファー」
3. 学会等名 若手研究者による古代中近東研究会「古代中近東における国際交流」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大澤 香
2. 発表標題 初期キリスト教における異邦人受容について - 新しい共同体形成のためのパウロによる概念構築の考察 -
3. 学会等名 日本新約学会第62回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kaori Ozawa
2. 発表標題 Divine Law and 'Natural Law' in Second Temple Judaism and the Acceptance of Gentiles in Early Christianity
3. 学会等名 Academic Workshop Co-organized by CISMOR and IKTINOS (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関